

BLEACHの世界でうちはサスケに転生しました

ポピー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

主人公はただのその辺にいるサラリーマンであった。

しかし主人公は目が覚めると赤子になっていた、しかもうちはサスケに転生していた。

これはタイトル通りうちはサスケに転生してBLEACHの世界に関わっていく物語である。

## 目次

うちはサスケに転生しました。	1
BLEACHの世界に来ていたようです。	3
虚が自宅を襲ってきました。	8
『団扇屋敷』にやってきました。	12

うちはサスケに転生しました。

これは一体全体どういう事なのだろうか。

俺はどこにでもいる普通のサラリーマン。だった。

なのに意識が浮上したかと思えば、目の前には自分を抱いている女性と、俺の顔を覗き込む男性の顔が。

俺はビツクリして声を上げた、のだが、声が出ない。

いや、音は出ているのだ。「あー」とか「うー」しか出ないだけで。

……これは、つまり。

「元氣な子だ。これは将来大物になるかもしれないな」

と男性が言った。

「そうね、アナタ」

と女性は言った。

……どうやら俺は知らない間に第二の人生を歩き始めたらしい。

「元氣に大きくなつてね、サスケ」

自分を見下ろして微笑むその女性の顔が、目に焼きついた。

結論から言おう。俺は『うちはサスケ』に転生したようだ。

物心がついた（ように見せかけている）頃から、自分がどんな状況になつているのかをようやく理解することが出来た。

見た目はうちはサスケの幼少期。中身は普通のサラリーマン。ど  
ういう組み合わせなのか俺にはさっぱり分からない。知りたくもな  
いが。

家族構成は原作通り、父親のうちはフガク。母親のうちはミコト。  
そして兄のうちはイタチ。

うーん。これは正直、辛い。

いや、『NARUTO』は俺にとって人生の教科書と言っても過言で  
はないくらい身近にあったものだ。俺は『NARUTO』と共に成長  
したと言つても過言ではない。

しかし、しかしだ。まさか自分がうちはサスケとしてこの家族と過

ごしているというこの状況、おかしいに決まっている。そうだろう神様よ。

しかもうちは一族は、その、何だ、色々と厄介な一族であるし、将来的に言えば滅亡することになっている訳だ。俺は復讐者になんてなりたくないぞ。

と、そんな事を考えていたのだが、その考えは杞憂に終わりそうだと、どうやら俺が産まれたこの世界は、身近な人間こそ『NARUTO』キャラだが、世界観は別のものようだった。

俺が住んでいるこの一軒家だって、『NARUTO』で見た家とは程遠い、どちらかと言えば現代風なものだ。

それに父親も原作よりは柔らかい雰囲気、のように感じられる。いや、原作も優しいところはあつたかな。

ともかく、この世界は『NARUTO』の世界ではない、これはハッキリした。けどまだどんな世界なのかは分かっていない。

出来れば平穏な日常を過ごせたらいいんだけどな。

「よし、サスケ。兄さんと遊ぼう！」

物思いに耽っていると勢いよく扉が開いたかと思えば、兄からの明るい声が部屋に響いた。

ちなみにこの部屋は俺とイタチ用の子ども部屋だ。俺がまだ幼いせいか、部屋には玩具が散らばっている。

キラキラとキレイな笑顔を浮かべてこちらを見る兄。なんか原作と印象が違うような気もするが、これもこの世界が平和だからだろう。

「うんっ！」

出てきた言葉はめちやくちや嬉しそうな声だった。

どうやらサスケ自身のブラコン気質がこの身体には染み込んでいるようだ。

しかし、今更だがこうなってはもう仕方がないので、俺は大人しくうちはサスケとしてこの第二の人生を楽しむことにしようと思う。

……まあ、この緩やかで暖かい日常も、そう長くは続かなかつただけだな。

BLEACHの世界に来ていたようです。

俺が産まれてから7年経った。

小学校一年生になって半年。グダるような暑さから解放されたれ、程よく心地よい風が吹き抜ける秋。

未だに光沢をもつピカピカのランドセルを背負って、5年先輩のイタチと共に小学校に向かう。

初めはイタチと一緒に登下校しているなんて原作からして有り得なかったのになあと思いつつ、この世界が現代により近い場所である事に安堵する。

そりゃ、時代が一つでも二つでも違っていたら、こうしてイタチと一緒に歩くことなんてなかなか出来なかっただろう。原作のイタチは確かアカデミーを1年で卒業している訳だし。

「それじゃ、授業頑張れよ、サスケ」

「うん、兄さんも頑張つて！」

一年と六年の教室は違う階にある。階段を登っていく兄を見送ってから、俺も自分のクラスに入ってしまった。

そして夕刻。

今日は委員会の集まりがあると、クラス委員を担当しているイタチより先に校舎を出る。

どこにも寄る場所はないので、よく話すクラスメイトと喋りながら帰路につく。

最後の一人と十字路で別れてから、まっすぐ家に向かって歩いていく。

もはや慣れ親しんだ道のりだ。

と、通りかかった細い脇道に無意識に視線を向ける。

その先に、自分と同じ年頃だろうか、女の子が一人立っていた。どうやら泣いているようだ、目元を手で多い、肩が僅かに震えているのが見える。

しかし、俺は目を疑った。

確かにそこに女の子はいるのだ。なのにその女の子は、そう、半透明に見えている。しかもわずかだが浮いているようにも見えた。

あれはもしや……幽霊？ まさか俺には霊感があつたとも言えるのか？

自分に霊感があつた事に驚いた。まあ幽霊が見える程度なら差ほど気になることはない。他の人間より少し見えるだけなのだから。

しかし、次の瞬間。

俺の目の前は真っ赤に染まった。

俺は、ソレを見てしまった。

目の前にいた女の子が、白い骨のような頭を持った大きな化け物に喰い殺される所を。

「――」  
言葉を失う。

だんだん小さくなっていく女の子の悲鳴。その声も聞こえなくなつた頃。

女の子はその形を失い、赤黒い肉片となつて辺りに散らばつていった。

真っ白だつた化け物の頭部は、女の子の血やら肉やらでベトベトだ。化け物は夢中になつているのか此方に気づいていないのだけが救いか。

……嘘だろ、まさかこの世界は。

あの外見、見た事がある。というかそうだ。あれは、ホロウ虚だ。

この世界には虚ホロウが存在している。つまりこの世界は『BLEACH H』の世界だつたということだ。

なんという事だ、この世界は全然平和じゃなかった。

しかも何で『BLEACH』の世界なんだ、勘弁してくれ。

頭の中は早く逃げなければという思いでいっぱいなのに、身体が思うように動かせない。俺はまだ小学一年生だぞ、あんな化け物見たらチビりそうになるに決まつてるだろ！

しかも俺には霊感があつた、つまり僅かにでも霊力があるという事だ。こんなんもう命が幾つあつても足りない。

と、パニックになつてゐる俺を他所に、ホロウ虚は女の子を喰い終え満足したのか頭部の血もそのままに姿を消した。

た、助かった……？

ホロウ虚が消えて安心したせいか、足に力が抜けて尻もちをついてしまった。そのまま呼吸を整える。

やばいものを見てしまった。普通の人間なら間違いなく気絶していただろう。原作知識があつて助かつたと思うべきか。

と、後ろからよく知つた声が聞こえてきた。

「サスケ、大丈夫か!？」

身体は未だに震えているので、視線だけそちらに向ける。酷く焦つた様子でイタチはこちらに駆けつけた。

「一体何があつた?」

「……お……おんな、の、こが……」

声が震えて思うように言葉が出せない。辛うじて動かせるようになった左手を持ち上げて、女の子がいた場所を指差す。

その指先を追つて視線をそちらに向けたイタチは、その惨状を視界に映すと顔をしかめた。

「……まさか、サスケまでも……」

「え……?」

ボソリと呟いたイタチの言葉は俺には聞き取れなかつた。

「とにかく、ここは危険だ。早く家に帰ろう」

立てるか?と手を差し伸べてくれるイタチに少しだけ気分が楽になつた。何ともわかりやすい性格だろうか。

イタチに手を引かれて、何とか家に帰ることができた。



「……そうか、そんな事があつたのか」

その日の夜。

下校中に目撃したことをイタチと共に父親であるフガクにそのまま伝えることになつた。



話を聞いていたフガクの表情はいつにも増して険しかった。多分この表情は俺がこの世界に転生してから初めて見るかもしれない。

「……父さん、あの化け物は一体何なの？」

とりあえず話を進めてもらおうと問いを投げる。

さすがに虚ホロウの存在を知っていた、なんて事は言えないからな。

「……お前が見たのは恐らく『虚ホロウ』と呼ばれる、言わば悪霊のような存在だ。本来ならばそう簡単に姿を現すものではないはずだが……」

そう言うとならフガクは顎に手を当てて考え込んでしまう。

……やつぱり虚だったか。俺は心の奥底で項垂れた。

「父さん、サスケにも虚ホロウが見えることが分かった以上、サスケにも話しておくべきじゃないかな」

「イタチの言う通り……だな。それにいずれは話さなければならん事だ。サスケ、よく聞きなさい」

イタチに促され、フガクは真剣な表情をして俺を見つめる。

俺も姿勢を正し、言葉を待つ。

「我々『うちは一族』は、従来の人間にはない特殊な力を持っていた一族だ。今や生き残りも多くなり、その力を発動できる者は少なくなっってしまったが……、お前が普通の霊やが見えてしまうのは、お前にもその力が存在しているという証でもある」

俺は黙ってフガクの言葉に耳を傾ける。

「代々うちは一族に伝わる瞳術、『写輪眼』。お前はイタチと同じく写輪眼を発動できる力を持っているようだ」

フガクは確信を持ってそう言った。

「写輪眼……」

俺は小さくその単語を復唱する。

まさかとは思っていたが、写輪眼まで出てくるとは……俺は胃が痛くなった。

どこまで行っても平穏とは程遠いようだ。

「今は使えなくとも、これから先写輪眼が発動する機会はあるだろう。もし写輪眼が発動したり、その傾向が現れるようなら俺に言いに来るんだ」

いいな？と俺を見つめるフガクは、先程と違い心配そうな表情をしていた。

写輪眼かあ、原作では発動条件が色々細かった記憶があるが、今回はどうなるのやら。

そう考えながら俺は頷いた。

イタチと一緒に部屋に戻る時、俺はとある事を思い出す。

そう言えば、この地域の死神は何をしているんだろうか、と。

「ねえ、兄さん」

「何だ？」

「あの化け物……ホロウ 虚つてさ、退治する人っていないの？」

俺の問いが少し意外だったのかイタチは少し目を見開く。

少し直球だったかなと後悔するも、イタチはいつもの表情に戻り、  
そうだな……と口を開く。

「ホロウ虚を退治する者は居る、この街のどこかにな。しかし日常でそいつ等を見かける事はまず無いだろう」

それもそうか。死神も霊体だし、もし仮に会うことが出来たとしても記憶ナントカって道具で記憶を飛ばされるんだしな。

「あの虚……ホロウどうなったかな？」

「始末してくれているはずさ、奴等はそういう仕事をしているんだからな」

……何か、イタチの機嫌が悪そうだ。

表情はいつもと変わらない筈なのに、何だか声色が低いと感じた俺はこれ以上踏み込むことはやめる事にした。

虚が自宅を襲ってきました。

それから数年が経過し、俺は中学生になった。『NARUTO』の原作が開始した年齢とほぼ同じになったわけだ。

勿論原作にあったイタチが一族を皆殺しにする事件など起こるはずもなく、俺は普通に成長していった。

あれから虚ホロウに出くわすことは殆ど無かった。

そして悲しきかな、俺の目に写輪眼が宿る事もなかった。

ただ、幾つか虚ホロウが関わっていると思われる事故や事件を耳にする機会が度々あった。

その事件の中に、イタチの親友だったうちはシスイが巻き込まれ死亡したという話も。

その時のイタチの心境は、きつと俺の想像を絶するものだったに違いない。

俺は中学に上がったばかりだが、イタチはもう高校2年になる。身長長の差は広まる一方だ。

体格差もある事から、小学生の頃から体力作りのために筋トレやら組手やらの相手をしてくれていたが、それもイタチが高校に入学してからめつきり無くなった。

まあ、イタチも忙しそうだし無理に声をかけるのは気が引ける。

それに例え俺が稽古をつけて欲しいと頼んだところで「また今度だ」と額を小突かれて終わりだろう。

イタチは隣町にある空座町の高校に通っている。BLEACHの主人公が通っていた『空座第一高等学校』とはまた別の学校だそうだ。空座町が重霊地になったという話も聞かないので、多分まだ原作の方は始まっていないんだろう。原作通りに進むのかも正直わからないが。

中学生になって3週間。環境が変わったためか、俺の周りに変化が起き始めていた。

と言っても、俺の周りに女子が集まって騒ぎ始めるといふものだ。

中には告白までしてくる女子もいる。

原作初期でもサスケはよくモテていたっけな。漫画で読んでいた時はこんなにチャホヤされて怨めしいやつと思っていたが、自分がそういう立場になると確かに…ウザいな、これは。

本当は何かしらの部活動に入っておきたかったんだが、女子の目が多すぎるため断念した。

更に女子に囲まれる俺を見て、気に入らない奴だとガラの悪そうな男共まで絡んでくるようになる始末。

返り討ちにしてやったが。

「今日も疲れた……」

帰宅部となった俺は日がまだ明るいうちに帰路につく。

入学してからまだ3週間しか経っていないはずなのに既に3ヶ月分くらいの疲労が溜まっていた。これは流石に身がもたない。

こんなことならNARUTOの世界で転生した方が良かったんじゃないかね?と思っただが、彼処は彼処で死と隣り合わせだ、あんま変わらないな。

そんな時だった。派手な音が俺の鼓膜を揺らした。

顔を上げると見慣れた家。どうやら既に自宅の近くまで来ていたようだ。

しかし次の瞬間、大きな音を立てて家の壁が崩れ穴がこじあけられたのだ。

そしてその穴から、白い髑髏が顔を出した。

『グオオオオオオオオオオオオオオ!!』

空気を震わせるような大きな咆哮。虚だ。

虚は俺の姿を捉えると、一目散に俺に突っ込んできた。

『オオオオオ!!』

俺は頭から突っ込んできた虚を難なく避ける。そしてそのまま全力で家まで走った。

ヤバイヤバイヤバイ。

油断していた。あの日以来だったもんでまさか家に現れるとは思わなかった。

イタチは確か帰宅は夜になると言っていたか、とにかく家の人間は無事か確かめなければ。

「父さん!! 母さん!!」

父と母を探すため声を上げる。返事はない。

家の中は埃と煙がモウモウと立ち込めていて視界が悪そうだったが、何故か今の俺は大して気にならなかった。

リビングに駆け込む。同じように声を掛けると、今度はよく耳に馴染んだ低い声が聞こえた。しかしその声はいつもより小さい。

「父さん!」

「……サスケ……か……?」

フガクはソファの死角に倒れていた。その腕にはミコトが抱かれていたが、意識はない。

二人は身体も倒れている床も、真っ赤に染まっていた。

目の奥が疼いた、気がした。

「父さん、一体何が……母さんは無事なのか!」

「サ……スケ……、お前は……逃げる……んだ……今のお前……なら……助かる……」

「何言ってるんだ!? 父さんと母さんを置いていくなんて……」

「気配を……消す能力を……使う…… 虚ホロウの……様だ……もう……俺

達は……助からん……この事を……イタチに……」

背後から虚ホロウの巨大な拳が落ちてくる。

俺は動かなくなった二つの身体を抱えてそこから離れると、拳は耳障りな音を立てながらソファ諸共床を叩き潰した。

眼が熱い。頭が痛い。

これが夢ならば今すぐ醒めてほしい、いやマジで。

「ハア……ハア……」

中学生の身体で大人二人を抱えるのはキツイ。それでもこの二人だけは、守らなければと思った。

例え、もう事切れていたとしても。

『グオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

ホロウ 虚の雄叫びが五月蠅い。

これだけの騒動があつて、未だに家の周りに人一人集まらないのが不思議だった。

再度飛びかかって来た虚ホロウを一瞥する。

「黙れ」

無意識に眼に力を込めていた。虚ホロウと視線が交わる。

ビクンツと不自然なくらいに身体を揺らした虚ホロウは、体勢を崩してそのまま地面に倒れ、動かなくなった。

……疲れた。

初めて眼力を使ったせいか、身体に力が入らない。

身体が揺れ倒れそうになるのを、誰かが抱き留めてくれた。

「よく頑張ったな、サスケ」

聞こえた声は、ここに居ないはずの兄のものだった。

その声に安心してしまったのか、俺は意識を手放す。

最後に見たのは、漆黒の炎に包まれる虚ホロウの姿だった。

『団扇屋敷』にやってきました。

目を覚ますと、真っ白な天井が目に入った。

ここが病院の個室だということを身体を起こしてから知る。

「気がついたか、サスケ」

俺が目を覚ましたことに気づいたイタチは、手に持っていた本を閉じて俺の顔色を伺ってくる。

「疲労は溜まってているが外傷は少ない。すぐ退院出来るだろう」

そう言っ額に己の掌を当ててくるイタチに「そうか」とだけ返した。

俺が気を失ってから、イタチが殆どやり繰りしてくれていた。

母は即死、父も半刻ほど意識があつたものの、イタチに最期の言葉を残して息を引き取った。

自宅は半壊している為、住居は移さなければならぬそうだが、すでに知人に話をつけているらしい。

「サスケがいなければ、父さんも母さんも肉体すら残っていないなかっただろうな……」

そう呟いたイタチの言葉に、ギュツと心臓を鷲掴みにされた気分になる。

そんな俺の様子に気づいたイタチはそんな顔をするなど頭を撫でた。

「お前は何も悪くない。あの虚はお前を見つけると直ぐに跳びかかって来たんだろ？父さんと母さんを襲うことで俺達を誘き寄せようとしたんだろう。恐らくあの虚を此方に送り込んだ主犯がいる」

「じゃあ……俺達、また狙われるのか？」

「可能性はあるだろうな。お前も写輪眼を開眼したんだ、以前より霊力も増えていくことだろう。その眼の扱い方も慣れてもらわないとな……」

ともかく、と続けイタチは立ち上がる。

「これから少し忙しくなる。退院の許可が出たらすぐに引越しの準備

をすゝるぞ」



数日が経過し、無事退院することができた俺はイタチに連れられて件の知人の元へ訪れていた。

空座町の山の麓にあるというその知人の家の玄関前にやってきた訳なのだが……。

「……デカ過ぎないか？」

そう、デカイのだ。玄関先にあった門のような扉を潜った時から思っていたが、やっぱりデカすぎるだろ。

通常の一軒家など比ではないくらいの大きさの建物。もはや武家屋敷だ。周りを取り囲んでいる塀も恐らくこの武家屋敷の一部なんだろう。

「そうだろう？ここはうちは一族が代々使っていた会合場所だ。と言つてももう何十年も使われていないそうだがな」

会合？何十年も使われていない？

首を傾げる俺をよそに、イタチは武家屋敷の呼び鈴を鳴らした。

「ここに住んでいるのはその会合を取り纏めていた者の子孫だ。さつきも言ったがほとんど使われていないんだが一族の者に何かあればこの『うちはやしき団扇屋敷』に来るようになってるんだ」

屋敷は相当広いのか、呼び鈴を鳴らしてもしばらく扉が開くことはなかった。その時間を有効活用するようにイタチからこの屋敷の説明を受ける。

しばらくして、中からドタバタと慌てる足音が聞こえてきた。

「おーおー、やっと来たか、ガキ共！」

ガラガラと引き戸が開き、男性が顔を出した。この顔にも覚えがある。

……あー、なるほどな。

「急ですまなかった。恩に着るよ、オビト」

「良いってことよ、これが俺の役目ってやつだしな。それにお前の親



父さんには何かと世話になってたからな」

俺たちを出迎えたこの男の名は、うちはオビト。

原作じゃ第四次忍界大戦の戦犯の一人であり、はたけカカシの友であつた男だ。

だが原作とは違い彼の半身は健在のようで、顔のシワも見受けられない。

「こいつがお前の弟か？」

「ああ。この人が話した知人だ。これから世話になる、挨拶しろよサスケ」

「……うちはサスケだ。よろしく」

名を告げて頭を下げると、何故か驚かれた。

「ハハツ、もつと小憎たらしい餓鬼かと思つてたが随分と素直だな。オレはうちはオビト。これから同じ屋根の下で過ごす同居人だ、ヨロシクな！」

そう言つて無邪気な笑顔で出してきた彼の手を、遠慮しながらも握り返した。

その後オビトに連れられ屋敷の中に入り、居間に通される。居間に入るまでに見たもので驚いたことといえば、部屋に続く縁側から見えるめちやくちや丁寧に整備された庭だろうか。

前世でもここまで壮観な庭は見たことがない。もう文化遺産レベルではないだろうか。

夢中で庭を眺めている俺の横でイタチが微笑んでいたが、俺は気づかなかつた。

「今日からお前の部屋はここだ。中にある書斎は好きに使つてくれて構わないぜ。必要なモンがあるなら言つてくれよな」

一通り屋敷の中を案内され、最後に自分が過ごすことになる部屋に着いた。

なんかもう、凄いの一言である。本当に今日からこんな所に住んでもいいんだろうか。

「遠慮なんかするなよ？厚意に甘えるのもガキの務めだからな」

なんて言いながら頭をグリグリ撫でてくるこの男。さすがにム

カツときたが初日から問題を起こす訳にもいかなかったため心の中で悪態をつく程度に収めた。よく耐えたぞ俺。<sup>サスケ</sup>

「じゃあ、俺はこれからの事をオビトと相談してくるよ。サスケは疲れだろう？飯の時間までゆっくりするといい」

そう言つてイタチは居間の方に消えていった。

本当は着いて行くべきなんだろうけど、確かに病院から直接ここに来たから少し疲れた気もする。

イタチの言葉に甘えて備え付けられていたベッドに寝転がった。

……そういえばこの部屋に来る途中で見かけた離れみたいな小屋、何の説明もされなかったな。

ちよつと独特な雰囲気があったから少し興味があったんだけど

……今度オビトに聞いてみようかな。

そんな事を考えながら眼を閉じた。

それからまた数日が過ぎた。

虚によつて破壊された家は建て壊すことになり、細かいところはオビトが話を付けてくれることになった。

話を聞いていたオビトの顔色が真っ青になっていたがきつと気のせいだろう。

父と母の葬式は関係者のみの小さい物となった。

転生する前の俺の家族は全員健在だったから、この歳で親を失った事は俺の中でかなり複雑な気持ちだった。

原作のサスケはもつと幼い頃に亡くしているわけだし、誰かを失うことがこんなにも辛いものなんだなと改めて心が痛くなった。

葬儀中ずつと眼の奥がざわめいていたような感じがしたが、何の前触れなのやら。

空座町で過ごすことになった俺は、登校していた中学校から空座町の中学校に転校することになった。

たった1ヶ月での転校に同級生(主に女子)達は残念がっていたが、俺としてはかなり助かった。

次の学校ではあまり目立たないように過ごそう……そう心に誓った俺だった。